てんとう虫新聞

'16.9.No.2
発行 市岡
責任 佐
0883-88-5
No.231

群舞するウスバキトンボ

報告 ちりバマキトンボ

暑い中えらなのは昆虫類。我が世の春と言う感じでキリギリスなんか草むらで鳴き続け、アブラゼミなんか暑さを強調してる様にもみえる。最近はその姿がめっきりなくなったトンボ類。その中では、毎年見続けられるのがウスバキトンボ(通称ではそばまきトンボと言う)。今年も六月九日にはじめて目にする。このトンボ。なかなか静止しないので、写真をとるのもむつかしい。しかし、暑さが続いてくると増えてきて八月を末頃になると、あちこちで群舞しはじめる。

本によれば、世界一三千四国で記録されていて、世界で一番分布域の広いトンボでそうです。

その上、標高二三〇〇メートルのヒマラヤでも記録されている世界最高地点のトンボとして記録されています。まだ高温下では、めずか四ヶ月で卵がえり、幼化してやはにっに一ヶ月で大トンボになるというハイスピード。分布域の広さ、成長速度の早さ、移動距離の長さともに、トンボ界のギネス保持者でそうです。

そんなウスバキトンボが五千六十匹も群舞し、太陽の陽差しで羽根が黄金色にきらきらしているのは、美しい限りです。昔は、タバコの栽培が終わり、ソバの種をまく頃よく見かけていました。

そんな印象が強い人トンボですが、今では、草刈りなんかして、一休みしてみると、刈った草地の上を飛っているのをよく見かけます。

にだ、私はウスバキトンボのヤゴを知らないので確認できませんが、田ンボなど水溜りで少なくとも一度は生まれているのか不思議の一つでもあります。

もうすぐ飛ばなくなってしまいますが、マヤキつかと同じように、次の年にあえるのが楽しみです。

ちなみに、ウスバキトンボを研究している人と知り合い、調査のお手伝いをはじめると、なかなか面白い自然観察の一部を感じることがあり、ますます楽しみが増えました。